

日本語の再発見

仮借 = 表音文字

「仮借」とは「仮に借りる」といふ意味の言葉であって、「既製の他民族の文字を、その本来の意味に関係なく、その発音だけを借りて“表音的”に用ひる」といふ用法を言ったものである。

子供の遊びに、蟻と蛾と塔の、三つの絵を並べて置き、これを“有難う”と読ませる遊びがある。この場合の蟻や蛾や塔の絵は、その意味に関係なく、ただ“あり・が・たう”といふ発音だけを頼りに“有難う”といふ言葉を想起させるものであって、これを絵でなく文字で行ったものが“仮借”なのである。

そもそも文字といふものは、直に消えてしまふ言葉を保存するために創作したものであるから、一字一字、言葉に対応して作られてゐる。だから、文字は、言葉が有つ“意味”と“発音”との両面を備へてゐるものである。

それで、文字を有たない民族が、先進民族の文字を借りて自分たちの言葉を表すためには、理論的には、「意味の方を捨てて、発音だけを借りる」か、「発音の方を捨てて、意味だけを借りる」か、この二つの方法が考へられる。

然し、理論的には二つの方法があつても、現実には例外なく“前者”の方法が採られてゐて、この方法が“仮借”と呼ばれるものである。

では、なぜ“後者”の方法が採られないのであろうか。それは、“前者”の場合は二、三十字の文字を借りれば足りるのに、“後者”だと二、三千字にもなるからである。それなら借りるよりも、自分で作った方がむしろ楽であらう。エジプトやインドや中国の場合、スメール文字を借りないで、自分で作ったのは、借りるよりも作った方が楽だといふ計算があつたのだと思ふ。

先に「言葉は思想が本体であつて、発音はその容器である」と述べた。だから、文字においても「思想が本体であつて、発音は容器である」ことは言ふまでもない。だから、仮借は、言はば“容器”だけの存在である。容器の形からその中に盛られた思想を搜り出さうとするものである。

それ故、仮借は本当の文字とは言ひ難いものである。「仮に借りる」と言ふわけである。ところが、西欧の学者たちは、この仮借に麗々しくも“表音文字”といふ名称を与へ、しかも、文字の最も発展した姿だと讃へてゐるのである。

然し、自らの力で文字を作ることが出来ず、よその文字の容器だけを借りて来て、最も安易な形で済ませようといふ用法である“仮借”に、どんなに立派な名前を付けたところで立派になるわけのものではない。大事な思想を欠いて、発音しか表すことの出来ない“表音文字”は、“仮借”といふ名称が最もふさはしいのである。